

# 『和漢朗詠集』古鈔本の注記札記について

——専修大学本・天理図書館本を中心に——

稲垣信子

## 一、はじめに

院政期以後の『和漢朗詠集』古鈔本には、当時の訓読を示す乎古止点や和訓だけでなく詩句や和歌の題・出典などを注記したものである。かつて、三木雅博氏は、建長三年（一二五二）の講書に用いられた菅原長成書写本（専修大学図書館蔵蜂須賀家旧蔵）における冒頭・立春部の佳句や和歌に付された注記について詳しく述べられ、平安後期から院政期、鎌倉初期にかけて、博士家に蓄積されてきた様々な『和漢朗詠集』に関する情報が集約されており、更に、写本を深く考察することにより従来の漢学史や歌学史の研究ではとらえられていなかった問題が見つかり新しい視点が開けてくる可能性が出てくるとも記され

ている<sup>①</sup>。

本稿では、数多く存する『和漢朗詠集』古鈔本のなかで、専修大学図書館蔵建長三年本（以下「天理本」と称する）<sup>②</sup>・天理図書館蔵貞和三年本（以下「国本」と称する）<sup>③</sup>・国立国会図書館蔵文化十一年本（以下「国会本」と称する）<sup>④</sup>・某氏蔵正安二年本日本古典文学会複製本（以下「ほるぶ本」と称する）<sup>⑤</sup>・京都府立総合資料館本「函架番号 特八二二一五六」<sup>⑥</sup>（以下「京都本」と称する）等の注記について考察する。

## 二、注記

或垂花下 潜増墨子之悲  
時舞鬢間 暗動潘郎之思

〈雨 八〇〉

A (専修本)

80

或垂花下潜增墨子之悲时舞歎

同暗勤潘郎之思

重撰出羽松尾道兼第八面抄餘紙

重撰出羽松尾道兼第八面抄餘紙

右半

B (天理本)

80

或垂花下潜增墨子之悲时舞歎暗勤

潘郎之思

重撰出羽松尾道兼第八面抄餘紙

重撰出羽松尾道兼第八面抄餘紙

今勘

C (京都本)

80

或垂花下潜增墨子之悲时舞歎

同暗勤潘郎之思

重撰出羽松尾道兼第八面抄餘紙

右半

原書散如余紙 和初書

五六十

この八〇番の詩句には、影印では次のように多くの注記が見出される。(A)〜(C)の順に注記のみ翻刻)

このうち『典麗賦選』の注記については、既に指摘されているので三木雅博氏の記述を参照されたい。それとは別に、A(専修本)・B(天理本)には右のように「右半」という注記が見える。この「右半」がどのような意味があるのか考えてみたい。これは「密雨散如絲賦」にかかわる注記と推察される。その下の「文選張景陽詩文」は、張景陽「雜詩十首」(其三)「密雨如散絲」の詩句であることを指摘しているものと思われる。この詩句は、現存の『六十卷本文選』では第二十九に収められている。

ところで、当該箇所「右半」について考えるに当たり、ヒントとなったのは、C(京都本)の注記に「左六十」と見えていたことである。

つまり、「右牽」の「牽」は或いは巻次と関わるのではないかと。すると、喚起されるのは通行の六十巻本ではない百二十巻本の『唐鈔文選集注』が気になることとなる。残念ながら張景陽の詩句は、百二十巻本の現存本には見出されない。但し、第五十六・五十九が現存しているので、その所収作品順から張景陽の詩句は、巻五十八に収められていたものと推定される。

従って、「右牽」の「牽」は「*右牽*」のように書写の変遷を経た結果生じた注記ではないかと考えられる。

猶、この『唐鈔文選集注』本の利用については反切注記からも窺えるようなので次に記すこととする。

三、反切注記をめぐる

専修本・天理本に注記されている反切について検討してみた。い。

「表二」は、注記されている反切と現存する韻書・古辞書に記載されている反切を対照させたものである。㊦は専修本を、㊧

〔表二〕

117		34		詩歌番号	
漾餘亮反		玉大奚反音夷	蕘	反切注記	
㊦	㊦	㊦		玉篇	大廣益會
	餘亮反	音夷	大奚切反	陶刊補欽切韻	唐写本王仁
	餘亮反			廣韻	
	余亮反			龍龜手鑑	
	余亮反			五經文字	
	餘亮切			禮部韻略	増修互註
				新撰字鏡	

481		437			433		369			319		222	
抄玉● 弥紹反			藿徒弔反 (或誤用入声他字也)		进此諍反		擣衣石也	砧同字也涉林反	礎	朶都果反		脆青歲反	
㊦		㊦		㊦		㊦				㊦		㊦	㊦
彌紹切			徒叫切		彼諍切		擣石	知林切		都果切		青歲切	
			徒弔反		北諍反								
			徒弔反		北諍反								
弥小反								陟林反					
										都果反			
												清歲此芮二反	

『和漢朗詠集』古鈔本の注記札記について

753		667		661		514	
驪力知反		鑠書藥反		甫方矩反		觚莫梗反	
⊕		⊕		⊕		⊕	
力支切				方禹切		莫梗切	
		書藥切		方矩切			
		書藥切					
力知切							
				方矩切			
						莫梗反	

は天理本を示し、例えば、「一一七 漾」と「二二二 脆」の二例は、専修本と天理本の両方に注記があることを示している。管見によれば、反切注記と全て一致するという現存韻書はないようである。『大廣益會玉篇』と一致する注記は四例「三四・二二二・三一九・四八一」である。「三四 蕤 玉大奚反音夷」「四八一 杪 玉云弥紹反」の「玉」は『玉篇』の省略と考えられる。「三四」については、枋尾武氏が翻字において

『玉篇』と指摘されている。<sup>3)</sup> から、これらは『玉篇』の逸文に加えることができるであろう。また、『唐写本王仁昫刊謬補缺切韻』と一致する注記は二例「一一七・四三七」であり、「四三三」についても「此」は「北」の誤写である可能性が高い。また、『廣韻』と一致する注記は四例「一一七・四三七・六六一・六六七」である。

以上のことから、専修本・天理本に注記されている反切は、

『玉篇』や『切韻』系の韻書をもとに記された可能性が高いように思われるのであるが、次のように興味深い例もある。

「七五三 驪 加知反」については、表に依れば『五經文字』の反切と合致していることが知られるが、実はこの反切は『文選』呉都賦（左太沖）の注に見られるものとも一致する。呉都賦は『唐鈔文選集注』では卷九に所収され、現存している。その該当箇所には次のように見えている。

未知驪籠之所蟠也（音決磧七歴反。蕭千積反。磧音歴。驪●力知反。蟠歩寒反。）

引用の「音決」は『文選音決』（『日本国見在書目録』に、十卷・公孫羅撰とある）を指し、それを『和漢朗詠集』に書き込みにした人が、直接利用した可能性も皆無ではないが、恐らく「七五三 驪」の反切については、『唐鈔文選集注』そのものに従って注記した可能性が高いように思われる。念の為に申し添えるが、他の『六臣注』等には右の反切の記事は見えないようである。

とすれば、前掲した反切の『玉篇』と注記されているもの

外については、『唐鈔文選集注』記載の引用という可能性が改めてクローズアップされてくることになるが、遺憾ながら現存本での論証は今のところこれ以上できない。

#### 四、古鈔本における漢数字をめぐって

前掲の影印は、『和漢朗詠集』上巻・秋部・秋興「林間煖酒燒紅葉 石上題詩掃綠苔」、A（専修本）、B（天理本）である。両本には「白 題仙遊寺二四」の注記がある。「白」は白居易もしくは『白氏文集』の省略であることは明白だが、詩題右下に付されている漢数字は一体何を意味するのであるうか。その点についても検討を加えておきたい。

次に掲げる「表二」は、『和漢朗詠集』において『白氏文集』を出典とする詩句に記されている漢数字注記をまとめたものである。表中の上段の番号は、『日本古典文学大系本和漢朗詠集』の詩歌番号を示し、本文の冒頭七字分のみ掲出している。『白氏文集』（那波本）巻数は、花房英樹氏（『白氏文集の批判的研究』・朋友書店・昭和三十五年）の綜合作品表に依っている。「専修本」・「天理本」・「国会本」・「ほるぶ本」ではそれぞれの写本に記されている漢数字を示している。参考のために永青文

A (専修本)

B (天理本)

十詩  
林間煖酒燒紅葉石上題詩排綠苔  
白  
題蓮寺

十詩  
林間煖酒燒紅葉石上題詩排綠苔  
白  
題蓮寺

〔表二〕

67	52	51	50	27	20														
鶯聲誘引來花下	惆悵春歸留不得	竹院君閑銷永日	留春々不住春歸	背燭共憐深夜月	歌酒家々花處々	冒頭の七文字を掲出	和漢朗詠集本文	冒頭の七文字を掲出	和漢朗詠集本文	冒頭の七文字を掲出	和漢朗詠集本文	和漢朗詠集本文	和漢朗詠集本文	和漢朗詠集本文	和漢朗詠集本文	和漢朗詠集本文	和漢朗詠集本文	和漢朗詠集本文	和漢朗詠集本文
18	13	58	51	13	56														
二八																			
	二三	八六	六一	二三	六六														
	三二	八六	六一	二三	六六														
		五十八	五十一	十三	五十六														
十八	十三	五十八	五十一	十三	五十六														

144	137	133	126	114	104	103	87	75											
背壁殘燈經宿焰	晚葉尚開紅躑躅	悵望慈恩三月盡	落花不語空辭樹	池色溶々藍染水	巫女廟花紅似粉	漸欲拂他騎馬客	白片落梅浮澗水	霞光曙後殷於火											
67	16	16	57	64	17	66	18	64											
(七)	二六	(二)	六七	七四		七六													
七七		二六	六七	七四	七七	七六	十八												
七七		十六	六七	七四	七七	七六	十八												
					十七		十八	六十八											
六十七	十六	二六	五十七	六十四	十七	六十六	十八	六十四											

『和漢朗詠集』古鈔本の注記札記について

243	242	235	234	230	223	221	209	208	204	175	171	168	160	159	151	150	147
嵩山表裏千重雪	三五夜中新月色	燕子樓中霜月夜	遲々鐘漏初長夜	相思夕上松臺立	大底四時心惣苦	林間煖酒燒紅葉	槐花雨潤新秋地	但喜暑隨三伏去	蕭颯涼風与悴鬢	風荷老葉蕭條綠	盧橘子低山雨重	竹亭陰合偏宣夏	露篔簹迎夜滑	青苔地上銷殘雨	風生竹夜窓間臥	風吹枯木晴天雨	堯頭竹葉經春熟
65	14	15	12	13	14	14	55	57	19	13	20	68	52	66	19	20	17
(七五)	二四	二五		二三	二四	二四	六五	六七		二三	(二)	七八		(七)	二九	二十	二七
七十五	二四			二三	二四	二四	六五	六七		二三	二十	七八	六二	七六		二十	二七
七十五				二三	二四	二四		六七		二三	十二	七八	六二	七六		二十	二七
六十五	十四		十二			十四			十九		二十						
六十五	十四	十五		十三	十四		五十五	五十七	十九	十三	卅	六十八	五十二	六十六	十九	卅	十七

483	387	375	356	352	345	341	338	328	327	309	308	302	301	286	266	254	252
茶能散悶為功淺	水消見水多於地	銀河沙漲三千里	一盞寒燈雲外夜	十月江南天氣好	八月九月正長夜	竹霧曉籠銜嶺月	可憐九月初三夜	霜草欲枯虫思苦	切々暗窓下嚶々	秋庭不掃携藤杖	城柳宮槐漫搖落	黃纈纈林寒有葉	不堪紅葉青苔地	前頭更有蕭條物	霜蓬老鬢三分白	不醉黔中爭去得	誰人隴外久征戍
56	67	53	69	20	19	16	19	66	14	13	68	54	13	67	67	18	16
	七七		七八	二十	二九	二六	二九	七六	十四	二三		六四	二三	(七)	七七		二六
六六	七七	六三	七八	二十	二九	二六	二九	七六	十四	二三	六八	六四	二三	七七	七七		二六
	七七	六三	七八	二十	二九	二六	二九	七六	十四	二三	六八	六四	二三	七七	七七		二六
										十二	六十八			六十七	六十七	十八	十六
五十六	六十七	五十三	六十九	卅	十九		十九	六十六	十四	十三	六十八	五十四	十三	六十七	六十七	十八	十六



792	754	744	743	742	698	616	512
蝸牛角上争何事	人間禍福患難料	蘇州舫故龍頭暗	往事渺茫都似夢	長夜君先去残年	愁苦辛勤顛顛盡	鶴籠開處見君子	帆開青草湖中去
56	57	57	17	64	14	57	16
六六	六七	六七	二七	六十四	二四	六七	二二
六六	六七	六七	二七	六十四	二四	六七	二二
五十六		五十七	十七	六十四		五十七	

庫藏『倭漢朗詠抄』<sup>(10)</sup>に記されている『白氏文集』の巻数も載せた。

〔表三〕は、先に掲示した〔表二〕をもとに『白氏文集』（那波本）の巻数と「専修本」・「天理本」・「国会本」の漢数字とが一致するものを示している。（和漢朗詠集の本文は省略）この表からまず、最初に考えられることは、漢数字が『白氏文集』の巻数ではないかということである。『白氏文集』（那波本）と巻数が一致する表記は七例である。ただし、「三〇八」については「六十八」ではなく「六八」と注記されており、表

〔表三〕

308	742	357	171	150	87	104	327	古典文学大系詩歌番号	白氏文集（那波本）巻数	専修本	天理本	国会本
68	64	20	20	20	18	17	14					
六八	六十四	二十	二十	二十	十八	十七	十四					
六八	六十四	二十	十二		十八	十七	十四					

記の混乱によるための「六十八」の誤りと理解すべきか猶問題は残る。

一方、〔表四〕は『白氏文集』（那波本）の巻数と「専修本」・「天理本」・「国会本」の漢数字とが一致しないものを示している。「二四三」「三四五」「五一二」以外は、『白氏文集』（那波本）の巻数と十（一部については九）の異同が見られる。更に、七六、七七、七八という漢数字の表記があり、これはど

〔表四〕

147	341	252	137	133	235	698	242	223	221	309	301	230	175	52	27	古典文学大 系詩歌番号
17	16	16	16	16	15	14	14	14	14	13	13	13	13	13	13	白氏文集(那 波本)巻数
二七		二六	二六	(二一)	二五		二四	二四	二四	二三	二三	二三	二三			専修本
二七	二六	二六		二六		二四	二四	二四	二四	二三	二三	二三	二三	二三	二三	天理本
二七	二六	二六		二六		二四		二四	二四	二三	二三	二三	二三		二三	国会本

754	744	616	208	126	792	483	20	209	302	375	160	50	345	338	151	67	743
57	57	57	57	57	56	56	56	55	54	53	52	51	19	19	19	18	17
			六七	六七				六五	六四				二九		二九	二八	
六七	六七	六七	六七	六七	六六	六六	六六	六五	六四	六三	六二	六一	二九	二九			二七
六七	六七	六七	六七	六七	六六		六六		六四	六三	六二	六一	二九	二九			二七

512	356	168	387	286	266	144	328	159	103	243	114	51
16	69	68	67	67	67	67	66	66	66	65	64	58
	七八	七八	七七	(七)	七七	(七)		(七)	七六	(七五)	七四	
二二二	七八	七八	七七	七七	七七	七七	七六	七六	七六	七十五	七四	八六
二二二	七八	七八	七七	七七	七七	七七	七六	七六	七六	七十五	七四	八六

のように理解されるべきであろうか。現存する『白氏文集』とは異なる巻構成のものが存在していたのか。それとも巻数表記ではない、別の考え方、即ち、例えば帙と冊次數という考え方も成り立つ可能性があるように思われる。例えば、「六七」は

『和漢朗詠集』古鈔本の注記札記について

第六帙七冊目（卷五十七）、「七四」は第七帙四冊目（卷六十四）、「七八」は第七帙八冊目（第六十八と第六十九は合冊と考えられる）というようにである。それに従えば、天理本の「三四五」は「二十九」とあるが「二九」の誤り、天理本・国会本の「二四三」は「七十五」とあるが「七五」の誤りと考えられることになる。

漢数字の注記は、『白氏文集』（那波本）と同じ漢数字の表記（「十」字を使用している）は、原則として巻数を注記しており、『白氏文集』（那波本）の巻数と異同がみられる漢数字は、帙と冊次數を注記していると考えるのが最も蓋然性が高いようである。つまり、漢数字の注記には、『白氏文集』の巻数表記と帙ならびに冊次數表記が併存していたと考えねばならないことになる。この不統一の原因の明確な理由はわからないが、可能性としては、巻数表記と帙ならびに冊次數表記の付記者が異なるということかも知れない。

猶、「五二二」の漢数字「二二二」は巻数表記も帙ならびに冊次數表記を考慮しても理解することはできない。

『白氏文集』の巻数表記については、後藤昭雄氏（『新日本古典文学大系 江談抄』・岩波書店・平成九年）が、『通憲入道藏

書目録』を引いて、『白氏文集』七十巻は七帙に、一帙十巻に収められていたとされ、更に、『後二条師通記』永長元年十二月五日に「江中納言（匡房）来臨。受文集説。一二六七帙所読也。」と指摘されている。また、佐藤恒雄氏（『藤原定家研究』・風間書房・平成十三年）は、後二条師通が永長元年十二月五日に匡房から受講した「一二六七帙」の文集も巻一から巻二十までと巻五十一から巻七十一までを内容とするものだったとされている。

## 五、まとめ

『和漢朗詠集』古鈔本に記された注記の一部について考察を行った。反切注記については、『玉篇』や『切韻』系の韻書を使用した可能性が高いように思われる。また、『七五三 驪』は、『唐鈔文選集注』の引用の可能性も考えられる。『白氏文集』を出典とする詩句に記されている漢数字の注記は、『白氏文集』の巻数表記と帙ならびに冊次数表記が併存していたと考えられる。

『和漢朗詠集』本文に訓みを示す訓点や和訓を付すだけにとどまらず行間には作品の由来や作者について注記して、下欄に

は出典や作者に関する注記等、様々な情報を書き込んで博士家独自の『和漢朗詠集』をつくりあげていったと考えたい。

## [注]

- (1) 三木雅博『和漢朗詠集』博士家写本の解読 学的情報としての（注記）の読み取り（院政期文化研究会編『院政期文化論集第二巻 言説とテキスト学』所収・森話社・平成十四年）
  - (2) 専修大学図書館蔵（蜂須賀家旧蔵）・建長三（一二五二）年菅原長成筆『和漢朗詠集』専修大学図書館蔵古典籍影印叢刊『和漢朗詠集』（専修大学出版局・昭和五十六年）
  - (3) 天理図書館蔵（佐佐木信綱氏旧蔵）・貞和三（一三四七）年安倍直明筆『和漢朗詠集』朽尾武者『貞和本和漢朗詠集』附漢字索引 和歌用語索引（臨川書店・平成五年）に影印・翻字がなされている。
  - (4) 国立国会図書館蔵・文化十一（一八一四）年菅原長親書『和漢朗詠集』朽尾武編『国会図書館蔵和漢朗詠集』内閣文庫蔵和漢朗詠集私注 漢字総索引（新典社・昭和六十年）
  - (5) 某氏蔵・正安一（一二三〇）年『和漢朗詠集』日本古典文学会複製（ほるぷ出版・昭和五十三年）
  - (6) 前掲注（1）論文。
  - (7) 『唐鈔文選集註彙存』一—三（上海古籍出版社・二〇〇〇年）
- 猶、論には以下のものがある。

山崎誠「式家文選字一斑——文選集注の利用——」(『中国文学問史の基底と展開』・和泉書院・平成五年)

陳獅『集注文選』の成立過程について(『中国文学論集』第三十八号・九州中国文学会・平成二十一年)

佐藤道生「平安時代に於ける『文選集注』の受容」(『注釈書の古今東西』・慶応義塾大学文学部・平成二十三年)

(8) 顧野王著『大廣益會玉篇』(中華書局出版・一九八七年)  
王仁昉著『唐写本王仁昉刊謬補缺切韻』(廣文書局・中華民国五十三年)

陳彭年撰『廣韻』(谷風主編『辭書集成』卷二十二〜二十三) 國結出版社・一九九三年)

天理図書館善本叢書漢籍之部編集委員会編『増修互註禮部韻略』(八木書店・昭和五十七年)

(9) 正宗敦夫編『日本古典全集 龍龜手鑑』(日本古典全集刊行會・昭和九年)

『五經文字』(杉本つとむ編『異体字研究資料集成 一期別巻 1』雄山閣出版・昭和五十年)

京都帝国大学文学部国語学国文学研究室編『古典索引叢刊 三 新撰字鏡』(全國書房・昭和一九年)

(10) 『細川家永青文庫叢刊 倭漢朗詠抄注』(汲古書院・昭和五十九年)

(11) 但し、ほるぶ本に於いて、「三〇九」は「十二」とあるが「十三」の誤り、「五〇」は「五十」とあるが「五十一」の誤り、「七五」は「六十八」とあるが「六十四」の誤りということになるのが前提である。この違いを単なる書写ミスと考えていいのかどうか問題は残る。